（様式３）

# 令和３年度　金沢型学習スタイル実践推進事業　報告書

| 明成小学校 | 小学校教科推進校 | 教科（生活科・理科） |
|---|---|---|

## １　研究の重点と具体的な取組

研究の重点として、（１）**「追究のストーリー」を生む手立て**　と（２）**見方・考え方を自覚的に働かせ、問題解決を促す手立て**　を設定し、実践に取り組んだ。

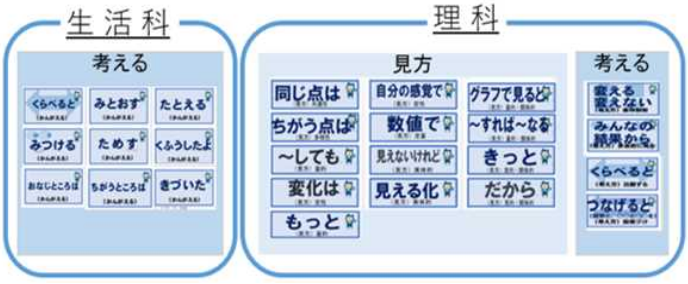
### （１）　「追究のストーリー」を生む手立て

生活科では，導入場面で，児童が共通体験を行ったり，生活経験を出し合ったりする場を設けることが，学習への興味を高め，見通しを持たせることにつながった。共通体験として，簡単な遊びやおもちゃを扱うことで，児童の学びの土台がそろうとともに，おもちゃそのものの動きや遊び方へと目が向き，おもちゃの工夫から遊び方の工夫へと学習が展開していった。また，単元のゴールとして「なつらんど」や「あきまつり」，「おもちゃランド」等を設定した。入学して間もない１年生は，単元にいくつかのミニゴールを設定することで，目的意識を持ちながら生き生きと学習に取り組むことができた。一方，学習経験があれば，低学年でも単元導入時にゴールを設定し，そこへ向かって学習を進めることは可能であった。その際，児童の実態を見極めることが大切である。

理科では，共通体験の他に，自由試行の場の設定や日常生活との関連，自然事象・現象の観察，イメージ図の比較などの工夫があった。導入時に日常生活と関連した教材を用いることで，児童は学習内容が生活と結び付いていることに気付くだけでなく，単元を通して生活とのつながりを意識しながら学習を進めることができた。これは，理科を学ぶ良さ，即ち，理科の有用性を実感することにもなった。また，単元のゴールに，ものづくりを行ったり，習得した知識を日常生活と結び付けたりする場を設定した。単元末に，学んだことを生かす場を設定することで，学習内容への理解がより深まるとともに，学習への満足感や充実感を抱くことができた。

### （２）　視点２　見方・考え方を自覚的に働かせ、問題解決を促す手立て

#### ①　「わざカード」を活用した見取りと価値付け




今年度も，学校全体の共通実践として「わざカード」を各教室，理科室に設置し活用した。これまで実践を積み重ねてきたことで，学びの連続性を生み，学年が上がるにつれて「わざ」を使った見方・考え方が身に付いてきている。

さらに，「わざカード」は評価としても有効であった。授業の中でわざにつながる児童の発言やつぶやきがあったときには，教師がそれを全体に広め価値付けることで、児童が自覚的に見方・考え方を働かせることを促すことができた。

#### ②　個の学びを深める「見て見てタイム」

生活科では、主に工夫する場面で「見て見てタイム」を取り入れた。自分のおもちゃをより良いものにしたい時にはそれを目的に，また，もっと楽しい遊びにしたい時にはそれを目的とした。これにより，個々の考えに広がりや深まりが見られた。

理科では，予想や考察の場面で「見て見てタイム」を取り入れることが多かった。予想場面では，事象・現象に対する個々の考えやイメージ図を比べ，実験で確かめたいことを見つける目的で行った。これにより，観察・実験及び考察の視点が明確になり，見通しを持って取り組むことできた。考察場面では，どの結果にも共通していることを見つける目的で「見て見てタイム」を行った。自分の結果のみならず，全体の結果から共通点を見出すことで，より妥当性のある考えを持つことができた。

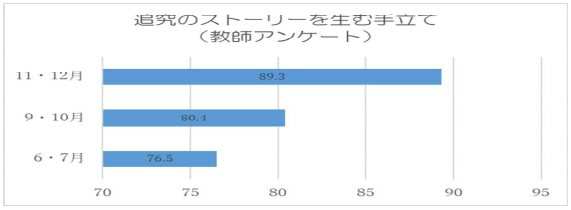
**③　問題解決の手がかりとなる思考の基盤の明確化**

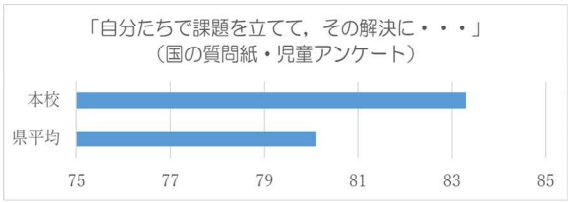
思考の基盤とは，問題解決の手がかりとなる既習知のことである。今年度は，その既習知が何かを教師自身が明確にすることで，学年間そして単元間のつながりをより意識できるようにした。実践を通して，思考の基盤は「考え方の基盤」「学び方の基盤」「知識・技能の基盤」に分類できることが分かった。さらに，単元の中で思考の基盤が形成され生かされるものもあれば，単元や学年をまたいで形成され生かされるものもあるということも明らかになった。

## ２　取組の検証

### （１）「追究のストーリー」を生む手立て

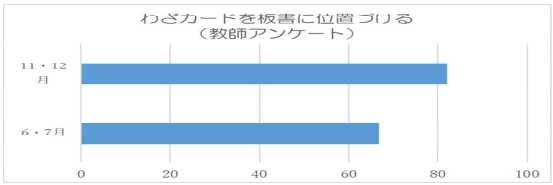
教師の自己評価『明成スタイル』チェックシートの「追究のストーリーを生む手立てを工夫できた」に対する肯定的回答は６・７月が 76.5%，９・10 月が 80.4%，11・12 月が 89.3%と増加していた。また，国の学力調査の質問紙「自分たちで課題を立てて，その解決に向けて情報を集め，話し合いながら整理して，発表するなどの学習活動に取り組んでいた」の肯定的回答も県平均の 80.1%に対し，本校は 83.3%であった。このことから，追究のストーリーを生むためにいろいろと工夫することで，児童の主体的な追究活動につながっていくことが分かった。

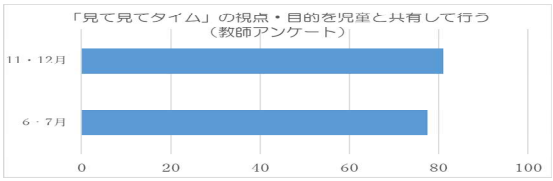



### （２）見方・考え方を自覚的に働かせ、問題解決を促す手立て

『明成スタイル』チェックシートの集計結果から「わざカードを板書に位置づける」で６・７月が 66.8%、11・12 月が 82.1%，「見て見てタイムの視点・目的を児童と共有して行う」で６・７月が 77.5%，11・12 月が 81.1%でどちらも上昇していた。児童のアンケートにおいても「わざを使って，自分の考えを広げ深めることができた」の肯定的な回答が８２%，「見て見てタイムで，自分の考えを広げ深めることができた」が９０%と高い値を示している。以上のことから，児童が自分の考えを広げ深めたりするのに，わざカードや見て見てタイムが効果的であることが分かった。




## ３　成果と課題

- 導入場面における共通体験や自由試行の場の設定，日常生活との関連や自然事象・現象の観察，イメージ図の比較は，児童の問題意識を高めて学習問題を設定したり，その後の学習に見通しを持たせたりするのに有効であった。また，単元のゴールとして活用の場を設けたことは，学習内容への理解を深めるとともに，自己の成長を実感したり，学習への満足感や充実感を抱いたりすることにつながった。
- 「わざカード」は学びの連続性を生むとともに，評価としても有効であった。わざの活用を教師が価値付けることで，児童が自覚的に見方・考え方を働かせることにつながった。
- 「見て見てタイム」で，実験道具を使ったり，グラフやイメージ図を指示しながら説明したりする児童が見られるようになってきた。今後も対話力のさらなる向上を目指していく。
- 思考の基盤については，学び方や考え方，知識などいろいろな要素が含まれている。また，形成された基盤が生かされる場面も様々である。そのため，共通実践として取り組むことに難しさを感じた。今後は，思考の基盤に含まれる「学び方」に絞って研究を進めていければと考える。